

1. 研究の背景と目的

本校では、知的障害のある子どもたちが、生涯にわたって自らの「性の主体者」となることを目指した、セクシュアリティ教育プログラムを模索中である。ここでいう「性の主体者」とは、性的に「自立」することを意味しており、性的に「自立」するとは、「科学的知識と人権にそった性的自己決定ができること (p. 226)」(関口、2017) である。そのためには、性、および自他の権利についての知識は必須のものである。そこで、科学的知識に根ざした性に関する知識の具体的な内容と指導方法について検討しているところである。

これまでは、一人一人の特性に応じた指導を行うための個別指導用の教材冊子「パスポート」を作成するとともに、その活用においては、集団での指導と個別指導を組み合わせることで、より効果的な性教育が展開できるのではないかという仮説の下で実践を重ねてきた。この「パスポート」は、平成 27 年度に作成し、それ以降、毎年試行的に取り組んできたものである(共同研究の成果として報告済み)。これまでの成果として、生徒への事前・事後アンケート結果から、この「パスポート」を用いた指導には、性に関する知識を増やしたり、性について他者(教師)と語る経験を通して性の課題に直面した時に誰かに「相談しよう」という気持ちをもったりするといった効果があることを確認している。

こうした継続的な取り組みの中で、高等部段階での問題が浮き彫りにされてきた。すなわち、既に知識として有しているものと考えていた、内性器の仕組みや生殖に関わる機能の成熟についての理解と知識の定着が不十分である生徒たちが少なくないことである。

この外性器、内性器の仕組みや月経、射精を内容として取り上げた授業は、中学部から高等部にかけて繰り返し行ってきたが、それらは男女別に行われることが多かった。そのため、自分の体のことについての理解もままならないばかりでなく、男女別に授業を受けていたことで、異性の体の仕組みについて学ぶ機会が十分でなかった生徒がいたのである。

こうした実態は、本校でのセクシュアリティ教育が参考になっている、国際セクシュアリティ教育ガイダンス(2020)においては、9~12歳の学習目標の中で、「性の健康や生殖にかかわるからだの部分を説明」することや、「生殖を引き起こすからだの重要な機能(月経周期、精子の産生、射精など)を説明」できるようになることが目指されていることからすれば、看過できない問題と言わざるを得ない。

そこで、本研究では、認知面や身体面の多様な発達段階にも配慮しつつ、生殖に関わる体の機能について理解を促す授業・教材を開発したいと考えた。中学部1年生の授業において試行的に教材を使用し、評価をすることで、知的障害のある子どもたちにとって分かりやすいセクシュアリティ教育の教材となっているかを検討することにした。

2. 対象と方法

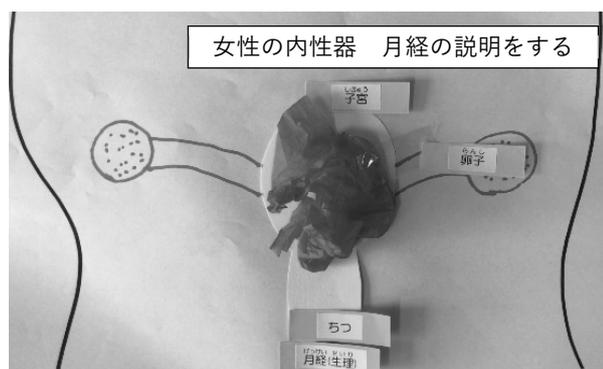
対象は中学部1年生(女子3名、男子2名)である。このうち、2名は小学部から内部進学した生徒

であり、他の3名は、近隣の公立小学校の特別支援学級から中学部に入学してきた生徒である。これより、各学校で学んできた内容や、性的なものへの興味、認知や体の発達の間でも、多様な段階にある生徒たちの集団である。

授業分析のため、動画を収録した。収録した動画を授業後に見て発言内容の分析を行った。この時、生徒たちが内性器の働きを知ることができたか、月経や射精の仕組みを理解することができたかを観点として確認した。なお、分析は主に筆者と担任とで行い、両者の評価が一致するまで繰り返した。

3. 授業の流れ

まず脳からの指令を性腺刺激ホルモンが伝えることで二次性徴が起こることを伝えとともに、それらが起こる時期は人それぞれであり、また、ホルモンが出にくい場合があつて、そのような場合は医師に相談する必要があることを伝えた。次に、胎児の成長する様子を示し、受精卵の大きさを予想した。そして受精卵は卵子と精子が合体したものであることを伝えてから、卵子と精子はどこからきたのかを確認した。その際には、生徒が個々に女性と男性の外性器と内性器をカラフルなマジックや画用紙等を使って切り貼りする活動を行った。そして、受精卵になるためにはどうしたらよいかを生徒自身で考えてみることに繋げた。



4. 結果と考察

個々に画用紙やマジックで内性器を制作しながら仕組みを学ぶ活動は、生徒が自分の好きな色を自由に選べるようにする工夫はしつつも、子宮やペニスの形に画用紙を切り抜いたものを準備しておいたりするなど、出来るだけ作業は単純化した。それにより、個々の作業能力による授業の進行への影響はほとんど見られなかった。このワークで参考にしたのはアクロストン(2020)のワークショップである。この手法を用いた理由は、工作を行いながらキーワードや、体内での器官の名前や位置、仕組みを確認することができるので、知識が定着しやすいのではないかと考えたからである。

赤ちゃんが育つ部屋(子宮)と膣のパーツが、体の中でどのように位置しているのかということを考える場面では、生徒は「赤ちゃんが生まれてくるのは足の間」という既にもっていた知識と、外から見るのでできないそれらのパーツの位置関係のつながりが明らかになった時に、「そういうことか。」と納得する発言が聞かれた。その後も、経血を花紙で表したもの

を、膣を経由して体外に出すことで生理を説明し、他にもモールを貼ったペニスを折り曲げて勃起を表現したり、精子を卵子に届ける様子を2枚の紙を合わせて確認したりしていった。これらの活動を通じて何度か先のような発言が聞かれ、これまで生徒がもっていた知識と知識がつながっていく様子が分かった。

授業の始めは恥ずかしさからか、なかなか発言することができなかった生徒が、制作をしている中で徐々に質問に答えたり、知っていることを自ら発言したりする様子も見られるようになっていった。これらのことから、個々に制作をし、具体物を操作する活動を取り入れながら行った授業は、外性器、内性器や生殖の仕組みを知ったり、理解を深めたりすることに有効であったと考えられる。

5. まとめ

今回の授業実践では、具体物を操作しながら進めたことで、自分のもっている性に関する知識をつなげたり、羞恥心を和らげながら新しい知識を獲得したりすることにおいて効果的な学習であったと考えられる。また、作業を通して発言が多くなっていく生徒がいたことから、セクシュアリティ教育の導入の授業としては、明るく楽しく性の話をする雰囲気作りにも効果的であったことが伺われる。

今後も授業の中で同じ教材を用いて復習したり、さらに和附特モデルの「アドバンス」の段階に至れば避妊や性感染症の学習へ発展させたりするなど、様々に活用できる可能性があるものと考えられた。

以上のことから、中学部1年生のセクシュアリティ教育の最初の授業として「楽しく正しく性を学ぶ」、その土台作りにも貢献する授業になり得たものと考えられる。

今後の課題として、授業を受けた生徒たちに、学んだ内容がどの程度定着しているのかを確認すること、加えて具体的に次なる学習へとどのように発展させることができるかについて検討する必要がある、そのために、集団での指導や個別指導の機会にこの教材を使用しながら改善を加えていきたいと考えている。

文献

関口久志 (2017) [新版]性の“幸せ”ガイドー若者たちのリアルストーリー. 株式会社エイデル研究所
UNESCO (2020) 国際セクシュアリティ教育ガイダンス. 明石書店.

アクロストン (2020) 3～9歳ではじめるアクロストン式「赤ちゃんってどうやってできるの?」いま、子どもに伝えたい性のQ&A. 主婦の友社